

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2014 秋号 **68**

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集 重要文化財琴ノ浦温山荘浜座敷の保存修理工事について



(写真上) 修理前の浜座敷を北東より見る
(写真下) 浜座敷広縁の修理状況

特集 重要文化財琴ノ浦温山荘浜座敷の保存修理工事について

一、はじめに

琴ノ浦温山荘園は、海南市船尾の沿岸部に所在する、面積四八、〇〇〇平方メートルを誇る広大な名勝庭園で、「新田の別荘」との愛称とともに広く県民に親しまれています。

庭園の中央に主屋、西側の矢ノ島南東端に浜座敷、東池泉の対岸に茶室、主屋の周囲には、伴待部屋、中門、西冠木門、南冠木門、北冠木門を配し、敷地北面に正門を構えます。建物の建設は、大正二年（一九一三）の浜座敷に始まり、同四年の主屋、同九年の茶室と続き、昭和初期までに正門が建てられ、概ね完了したとみられます。主屋、浜座敷、茶室の三棟は平成二十二年六月に重要文化財の指定を受け、あわせて正門と、主屋の周辺に配された伴待部屋、北冠木門、南冠木門、西冠木門、中門の計六棟が附指定となっています。

黒江湾に臨む浜座敷は、海からの強風と矢ノ島から落下してくる樹木の枝などの影響で、瓦葺き屋根の各所で破損が目立ち始めていました。そこで、正門、北冠木門と

ともに、同二十五年六月より国庫補助による修理事業に着手し、同二十六年十二月竣工予定で工事を進めています。

二、浜座敷の概要と整備の履歴

浜座敷は、岩盤に縁束を高く立てた懸造り風の外観をもつ建物です。建築面積九四・六六平方メートル、屋根は入母屋造及び寄棟造、本瓦葺きで、小屋はキングポストを配した洋小屋を組み合わせます。十畳の北



図面 1. 浜座敷平面図



写真 2. 浜座敷広縁部分の軒垂下状況（南東）

浜座敷東面の外周は、直径 14cm ほどの角柱に対して、南側で柱間 3 間（約 6m）、北側で柱間 2 間（約 4m）と広く、その間では軒桁が大きく垂れ下がってしまっていました。



写真 1. 浜座敷屋根の修理前状況（南東）

台風による破損を受けて平成 10~11 年に屋根の部分修理を受けていますが、近年にも雨漏りを来したことを受けて、棟積をシートで覆うなどの応急修理が行われていました。



写真3. 大正期の浜座敷外観（南東より）

東縁、南縁ともに、雨戸戸袋脇にガラス障子が収納されている様子がうかがえます。そのほか、屋根棟積の鬼瓦上の鳥龕（とりぶすま）瓦は、修理前には大半が欠失していました。

側と西側に六畳を配し、南側と東側には矩の手に広縁を廻らせます。十畳には西面に琵琶棚付の書院・床・違棚を備え、広縁は垂木を吹き寄せ・疎らに配した化粧軒とし、高欄を備えるなど、軽妙な構成をとります（図面1、表紙写真）。

建立当初、十畳の西側は間口が一間（五畳）の空間が設けられ、北側の四畳分と南側の一畳分の二室に間仕切られ、それらの西側も細かく間仕切られて、物入や便所などの水廻り施設が設けられていたと推察されます。

外観上の特徴として、南・東・北三面の広縁には雨戸とガラス障子が配されています。

昭和七年頃までには、建物西側の増築により現状の規模となります。同時に、広縁（南）で戸袋の移設も行われました。その後間もなくして、二本溝の敷鴨居の外側に雨戸用の溝を付け加えて三本溝とし、従来の二本溝でガラス障子を引き違いに使用できる形式へと変更されました。同十七年には財団法人として一般に公開されており、その頃までの改変と考えられます。

以降、戦時中の金属供出や戦後の進駐軍による接収、南海地震を経て、同二十五年より温山荘園の公開が再開されます。

当初は二本溝で、それぞれが一本溝に納まります。柱の外側に位置するガラス障子が平滑に並ぶため、ガラスの壁面で側面を覆い尽くしている様な状況となります。また、大正期と推定される古写真では、雨戸戸袋の脇にガラス障子が重ねて収納されている様子が確認でき、付敷居・付鴨居にはそれを示す痕跡も残っています（写真3）。これと同様とみられるガラス障子収納用の金属製棚が主屋に残っています（写真4）。



写真4. 主屋に現存する戸袋脇ガラス障子収納棚



写真6. 浜座敷屋根野地の分解状況（南東）

一部で雨漏りによる野地の破損は生じていましたが、海沿いの建物の屋根野地としては100年が経過した現在もすこぶる健全な状態でしたので、修理における分解範囲も必要最小限に留めました。



写真5. 浜座敷屋根瓦の分解状況（南東）

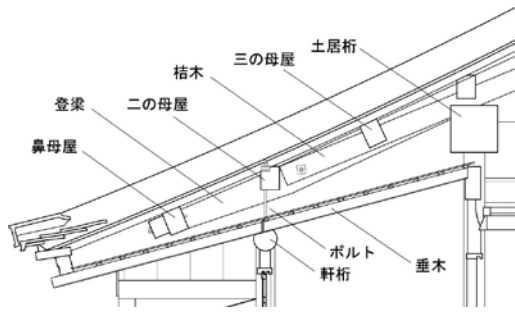
屋根面は、軒先瓦や棟積の補修を除けば概ね建立時の施工のままでした。南面では潮風の影響を受けて瓦や葺き土の風化が進んでいましたが、平瓦下の葺き土への影響は驚くほど少ないものでした。

平成十年の台風被害で緊急工事を実施した後、翌十一年には園内の複数の建物における補修が実施された中で、浜座敷でも瓦屋根の補修や南西便所部分の庇屋根の補修、外壁の漆喰塗り替え等の工事が行われ、腐朽していた広縁（南）の木階も撤去されました。

三、浜座敷の建築的な特徴

浜座敷の外観及び構成に関しては、東大寺三月堂（法華堂）をモチーフとして設計されていることが複数の資料から明らかとなりました。一方で、洋小屋やガラス障子のほか、合板の天井板など、近代的な構法や材料も積極的に使用しています。

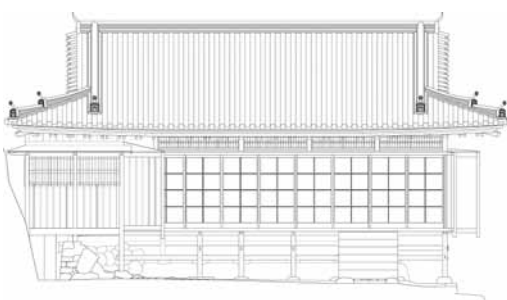
化粧材は梅材で統一され、深く緩い勾配の軒は吹き寄せ垂木に化粧小舞を配し、径五寸程度の細い磨き丸太の軒桁で受ける構成は、実に軽快な印象です。ただし、広縁が廻る南面と東面においては、側柱筋を紹介して本瓦葺きの屋根を支える必要があります。最大で6mにも及ぶ柱間は、実際には野母屋に配したボルトから軒桁を吊り込む構造となっていました（図面2）。少し丁寧に解説しますと、登梁とそれに絡めた桔木によって軒先の野母屋を支持する形式です。軒先の乱れを抑えるために、鼻母屋の外へ通し材をボルト締めで抱き合わせるなどの工夫も行われていました。



図面 2. 浜座敷軒先部分の断面図



写真 7. 浜座敷の軒先瓦（上）と大棟鬼瓦（下）



図面 3. 浜座敷南立面図（修理後）

垂下してしまいました。この理由として、外観の意匠を三月堂に準じた結果、本瓦葺き屋根を十分に支持するだけの小屋組材を配する空間が確保できなかったものと考えられます。屋根瓦に関しては、同誌六十六号でも紹介した通り、三月堂を模した瓦文様の採用（写真7）と、平瓦の均質な形状と銅釘止めによる安定によって、百年ものあいだ風雨に耐え忍んで来られたことが特筆されます。また、同じ種類の瓦においても複数の瓦屋で分担製作されていました。

今回の事業では、分解工事に伴う調査成果を反映し、温山荘園全体が最も整った昭和初期の状態に各建物を復することを主眼とした復原修理を実施しています。その内容は、台風などで欠失していた建具類や屋根棟積、広縁（南）木階の復旧、戦時中に供出されたとみられる広縁高欄の金具類や庇屋根の銅板葺きの復旧、などです（図面3）。

四、浜座敷での保存修理について

年に創業した新田ベニヤ（現株ニッタクス）の製品が試験的に使用されたと推察されます。この傾向は、同九年以降に建築された茶室や主屋増築部分の天井板などでも確認でき（同号コラム参照）、これらと同時期に造成された東池泉の護岸での巨大な擬石類の使用とも通ずると考えられます。

あわせて、広縁部分での構造補強も実施しました。これは、前項で述べた軒の垂下に対する小屋組材の補強に加えて、修理事業に先立って実施された耐震診断事業の結果を踏まえた補強の二本立てとなりました。軒垂下の抑制は、ガラス障子復旧の条件ともなります。今回の分解範囲では登梁や桔木の取替も含めた強化は不可能でした。そこで、軒桁直上の野母屋の傍に鉄骨製のラチス梁を挿入し、その鉄骨梁から軒桁を吊り込むことを計画しました（写真8、11）。この計画に対して構造設計者からは、耐震診断においても広縁部分での脆弱性が指摘されており、鉄骨梁を利用した耐震補強は有効である、との意見をいただきました。

一方で、修理に伴う調査では、建物を適切に保持していくためには、屋根瓦葺きを修理前と同様に土葺きとすることが最善であると判明しましたが、耐震診断時の解析による補強案は空葺きとした場合のもので、その内容の見直しが必要不可欠もありました。

そうした経緯のもと、実測により得られた屋根荷重を用いて、耐震補強と軒補強を組み合わせた補強効果を改めて検討した結果、必

要かつ実施可能な補強は土葺き、空葺きいずれでも同等となることが確認されました。今回の修理では、事業者、施工者、修理技術者、構造設計者、有識者で協議した補強案を文化庁の承認も受け、土葺きの効果を期待しつつ、その効果を損ねない程度に葺き土量を軽減する方法を選択しました。

（写真12）。

五、さいごに

冬季休園のあいだに今回の修理事業は終了します。春の開園時には、昭和初期頃の姿を取り戻した浜座敷をご覧になっていただけるかと思えます。（下津健太郎）

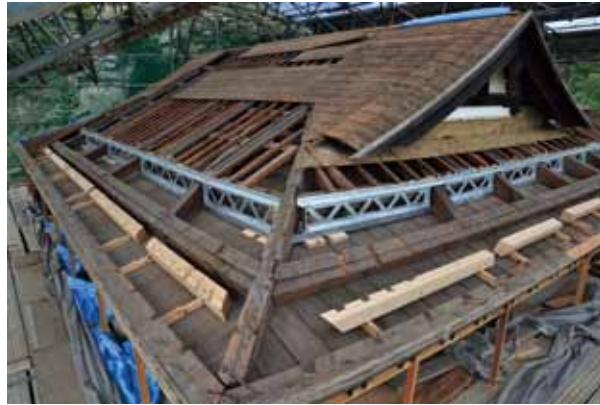


写真8. 浜座敷広縁部分の軒補強状況（南東）



写真9. 浜座敷野地の組立状況（南東）



写真12. 浜座敷屋根下地の施工状況（南東）

軒先には葺き土量軽減のため棧を取り付けました。



写真10. 鉄骨梁の組立状況

人力による組み立てが可能な部材での構成としました。



写真11. 軒桁の吊り込み状況



写真13. 屋根瓦葺きの状況

修理前と同様に平瓦を葺き土と銅釘で固定していきます。



出塔の水道

橋本市の北西部、藤の花で有名な子安地藏寺の近くに『出塔の水道』と呼ばれる文化遺産があります。

山田川左岸の湧水をあつめ、川に直交するかたちで川の下を潜らせて右岸側に導水する暗渠構造の水利施設です。いつの時代にくられたものか、その構造がどうなっているのかまったくわかっていませんでした。

今回、山田川の砂防工事に伴って、はじめてこの『出塔の水道』の発掘調査を実施する機会を得、その構造や築造時期を明らかにすることができました。

その構造を簡単に説明すると、まず水流す本体の中心部分は、30cm四方ほどの溝になっており、側石には40cm前後の石を横置きに用い、この側石に直行するように大振りの石を蓋石として架橋しています。さらにこの本体部を覆うように20cm前後の河原石を1mほどの厚さにわたって充填していました。また、これらの東側に沿って

黄色の粘土が帯状に厚く貼られていることも判明しました。

充填されていた河原石は、本体部分を擁護するとともに、おそらく伏流して西側からしみだしてくる水を受け入れ、本体部へと導く役割を担っていたものと思われます。逆に黄色の粘土帯は、ここで水を塞ぎ止め、東側に逃がさないための遮水層として施されたものでしょう。

出土遺物としては、極めて少量ですが江戸時代中期（18世紀中頃）の伊万里の染付



写真1 河床部の調査区全景（南から）
本体部の蓋石と東側に貼られた黄色の粘土帯

け碗などが出土しており、おそらくこの頃に築造されたものと考えられます。また、用途としては、南側に所在する柏原地区の灌漑用水として築造されたものと言えます。

「山田川の水は涸れても出塔の水は干上がったことがない」と、地元で言われ続けたように、今もその水量を誇っています。

今回の調査を通して、あらためて当時の人々の水に対する切実な思いや、それを得るための努力、さらには技術力の高さに感じ入った次第です。
(村田 弘)



写真2 蓋石をはずした状況（南から）
水の流れと充填されていた河原石の状況

子供のころ毎週楽しみにしていたドラマ「大草原の小さな家」。その小さな家とはセルフレッドの野趣あふれたもので、アメリカの西部開拓時代そのものを象徴するような建物でした。主人公の家族が協力して農作業に励み、家畜と触れ合う姿が自然と目に浮かびますが、よく思い出してみると、一家のお父さんは大きな機械を据えた製材所で働く職工でもありました。そう、古き良き牧歌的な世界と、急速な近代化のはざまにあの豊かな物語が展開していたのです。ちょうど明治時代の初めころのお話です。

海南市の温山莊園は、それから40年ほど後に造られた広大な別荘ですが、当時の日本には、このドラマと重なる背景も残っていたのでは、と想像してしまいます。広大な園内の一角には創設者が故郷より取り寄せた温州蜜柑が植えられ、池のほとりにも茅葺農家風の茶室が佇み、鄙びた風情を醸します。大正の初めに建てられた浜座敷や主屋なども和風の意匠でまとめられた木造建物です。しかし中に入ると、建具にはめられたガラスを通して光が部屋の隅々にまで満ち溢れ、江戸時代までの重厚で薄暗い室内とはまるで印象がことなります。

明るく照らされた天井も幅広の銘木やボルト天井など、新素材であるベニヤ合板による新たな表現の悦びで満ちています。時代を造り出していくという職人の気概に支えられた黎明期の工業製品。見つめていると、川の流れを動力としたドラマの製材所の音が聞こえてくる気がします。(多井 忠嗣)



温山莊園茶室 廊下の天井。
天井板が無垢材では表現できない曲面に張られている。

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

少し楽屋話しを。このところ筆者のように埋蔵文化財の調査研究をする技師の募集が急増しています。ちょうど世代交代の節目なのです。募集要項を目にすることが多くなりました。

十数年前の競争率何十倍という狭き門を知っているだけに隔世の感があります。大学で考古学を学び、将来にわたってその世界で生きていこうとする若者には、よい時代、よろこばしいことですね。

そうした世代交代の中で、この世界にも「二世技師」がつつぎと生まれてきています。もちろん古くは、大阪府の技師として活躍され、瓦等の研究者としても著名だった藤沢一夫先生のご子息、藤沢典彦・真依さんご兄弟がよく知られています。

少し変わったところでは、考古学協会の会員で、自ら発掘調査もしておられる俳優の荻谷俊介さんの娘さんも、その父の影響をうけ考古学の世界に進んでおられますね。

筆者が世話になり、懇意にしていただいている範囲では、長く平安京調査の第一線で活躍され、いまは京都市の大学で後身の指導に当たられている鈴木久男さんのご子息が京都府の技師としてデビューされました。去年、その鈴木先生とジュニアの三人で一緒にする機会があったのですが、見ていて微笑ましかったですね。たまには親子で酒を酌み交わしつつ瓦の編年談義などをやるのだとか。聞いていて羨ましいかぎりでした。

残念ながら愚息は、考古学方面には進まず、「航空宇宙工学」などというわけのわからないことをやっています。父は地面より下で、息子は空より上。「食っていきけるのかあ?」と心配して尋ねたら「考古学よりマシやろ」と言われてしまいました。

なーに、そんなことはないですよ。考古学の方がずっと堅実でまともです。なにしろ地に足がついている——。(村田 弘)

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2014年秋～2014年冬)

(公財) 和歌山県文化財センター

- 「歩いて知るきのくに歴史探訪～藤白神社から琴ノ浦温山荘園までを巡る～」
2014年10月25日 (土) 13:00～16:00
- 「紀州のあゆみ－和歌山県内埋蔵文化財調査成果展－」 ※展示会は県内3会場を巡回して開催します
場所：県立紀伊風土記の丘資料館 2014年 9月 9日 (火)～9月23日 (火)
場所：御坊市歴史民俗資料館 2014年11月18日 (火)～12月 7日 (日)
場所：田辺市立歴史民俗資料館 2015年 1月27日 (火)～2月15日 (日)
- シンポジウム「熊野三山の考古学－発掘調査から見た信仰の始まりと展開－」
場所：田辺市文化交流センター たなべる 2階大会議室 2014年11月22日 (土) 12:50～16:30

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 特別展「須恵器誕生－新しい土器は古墳時代をどう変えたか－」 2014年10月 4日 (土)～12月 7日 (日)
- 記念シンポジウム「須恵器誕生」 2014年11月 2日 (日) 10:30～15:00
- ミニ展「ジュニア考古学研究応募作品展」 2014年12月23日 (火)～1月11日 (日)

和歌山県立博物館

- 企画展「江戸時代の紀州の画家たち」 2014年 9月 6日 (土)～10月10日 (金)
- 世界遺産登録10周年記念特別展「熊野－聖地への旅－」 2014年10月18日 (土)～12月 7日 (日)
- 企画展「墨一色－拓本の世界－」 2014年12月16日 (火)～1月18日 (日)

高野山霊宝館

- 第35回高野山大宝蔵展「山の至宝」 2014年 7月19日 (土)～10月 5日 (日)
- 秋期企画展「国を護る神仏」 2014年10月11日 (土)～1月12日 (月)

和歌山市立博物館

- 秋季特別展「江戸時代を観光しよう－城下町和歌山と寺社参詣－」 2014年10月18日 (土)～11月24日 (月・祝)

掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙 (写真上) 修理前の浜座敷を北東より見る・(写真下) 浜座敷広縁の修理状況
- 2 特集「重要文化財琴ノ浦温山荘浜座敷の保存修理工事について」
- 6 埋蔵文化財課 短信 「出塔の水道」
- 7 きのくに歴史小話「古建築修理の逸話⑨ ベニヤ合板」
「発掘屋余話㉗ 二世の時代」
- 8 催し物案内

風車68 (2014・秋号)

平成26年9月30日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】 〒640-8301 和歌山市岩橋1263-1

TEL 073-472-3710

FAX 073-474-2270

maizou-1@wabunse.or.jp

7月1日より、事務局が上記の住所に移転しています。